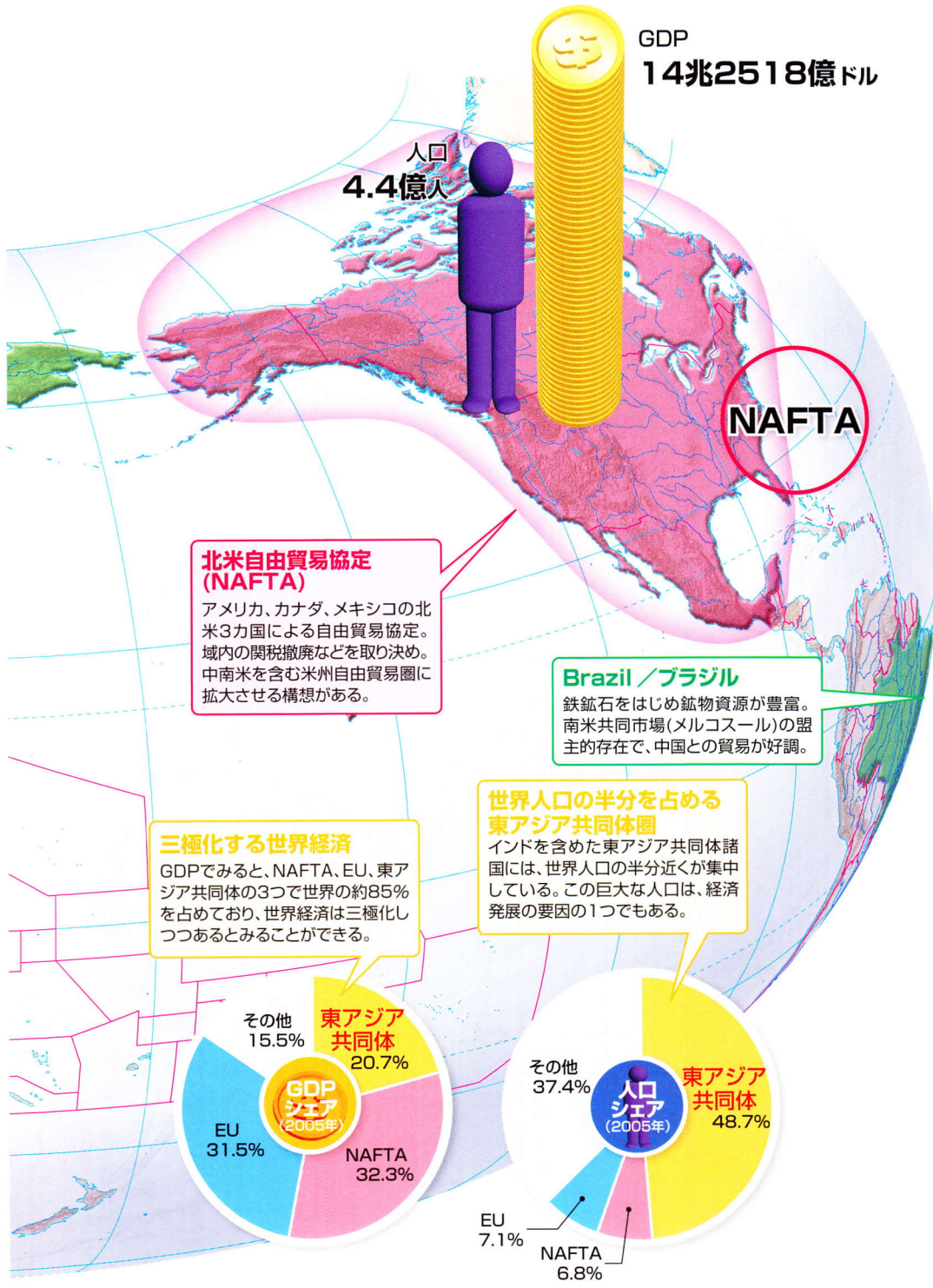


東アジアが行方を握る 21世紀の世界経済



現代

中国、インドといった
新興経済大国の動向が、今後の
世界経済を左右するものとして
注目を集めつつある。



1990年代に加速した 欧・米の経済統合

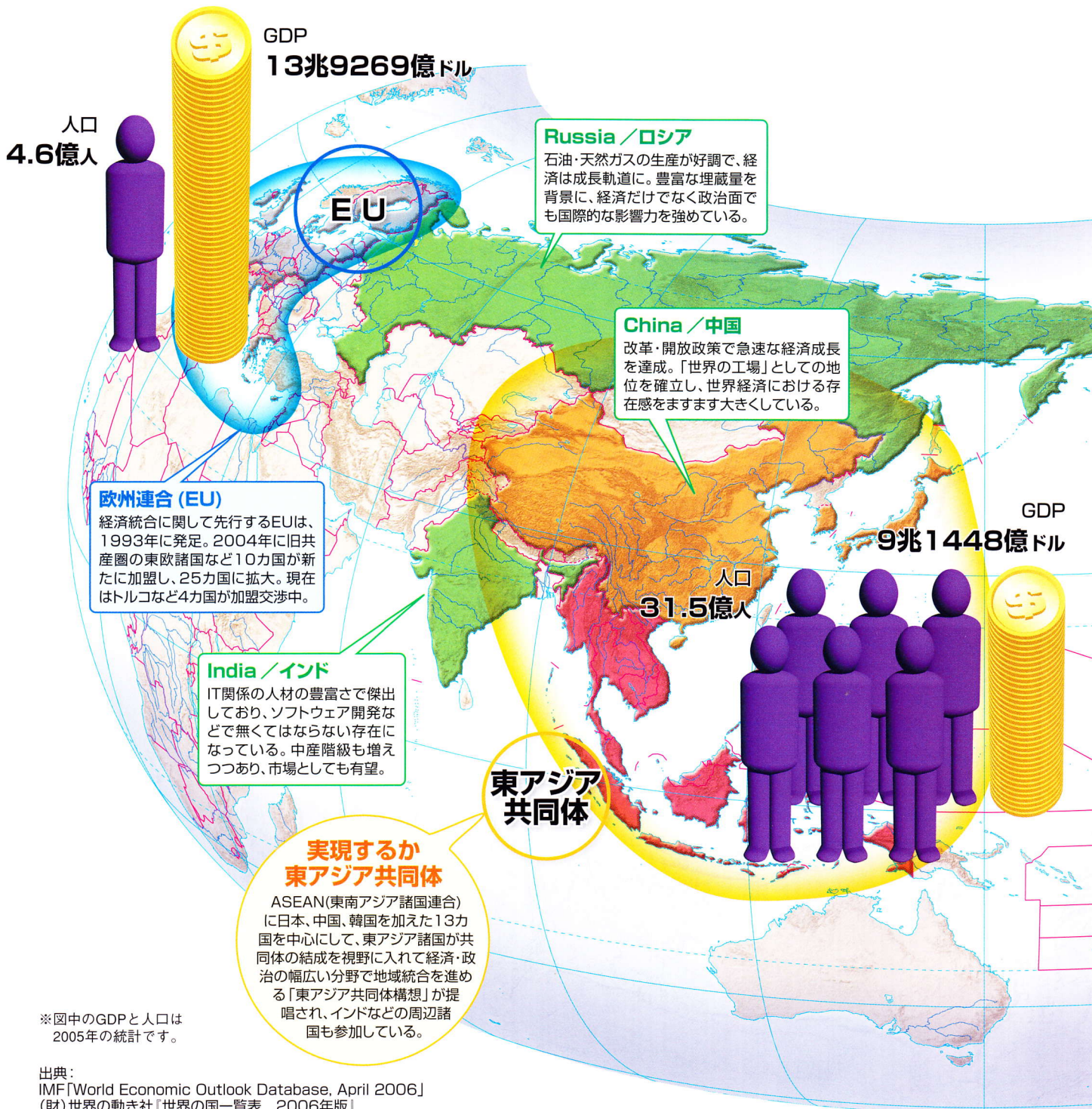
1980年代後半から、世界各地で地域経済圏の形成が活発化した。

70年代以降不況に見舞われ、アメリカや日本などに遅れをとることを懸念したヨーロッパでは、通貨統合を含めた単一市場の形成を旨とするようになった。そして、93年にはヨーロッパ共同体(EC)を拡大・強化した欧州連合(EU)が発足し、99年には米ドルの一極支配に対抗する統一通貨ユーロが誕生した。その後、2004年には東欧諸国など10カ国が新たに加盟し、EUは人口や経済規模でアメリカに匹敵する巨大な単一市場となった。

また、アメリカもこうしたヨーロッパの動きに対抗して94年にはカナダ、メキシコと北米自由貿易協定(NAFTA)を発効し、段階的な関税撤廃などによる市場統合を目ざしている。

存在感増す東アジアと 30億人巨大市場の可能性

一方、東アジア諸国は1997年の経済危機で一時は成長にブレーキがかかったが、「世界の工場」とよばれる中国が、富裕層の拡大とともに巨大市場としても期待されるようになると、中国にけん引される形で活力を取り戻した。こうして



※図中のGDPと人口は2005年の統計です。

出典：
IMF「World Economic Outlook Database, April 2006」
(財)世界の動き社「世界の国一覧表 2006年版」

「BRICs」とは、ブラジル、ロシア、インド、中国の新興経済大国の頭文字をとった造語である。2003年にアメリカの大手証券会社ゴールドマン・サックス社が発表した投資家向けレポートの中で使用され、注目を集めた。これら4カ国はいずれも世界有数の人口大国であり、国土が広いことや経済成長率が高いことも共通している。とくに中国、インドはめざましい経済成長を遂げており、今後数十年間でアメリカや日本に匹敵する経済大国になるとする試算もある。

21世紀の経済大国!? BRICsの台頭

東アジアは世界経済での存在感を増し、世界経済は米・欧・東アジアの三極化の様相を呈するようになった。

そんな東アジアの各国は、97年の経済危機以降、地域協力の必要性を痛感し、ASEANと日・中・韓による首脳会議を開催。さらに中国がASEANとの自由貿易協定(FTA)締結を模索しはじめると、東アジア地域の経済圏構想はにわかに活発化。2000年からはASEAN十日中韓による「東アジア自由貿易圏」創設の話し合いが始まり、02年からは「東アジア共同体」構想が提唱されるようになった。この構想の一環として05年12月に開催された東アジアサミットでは、ASEAN十日中韓に加え、新興経済大国「BRICs」の一角であり、10億人の人口と自由化政策を背景に経済成長を遂げているインドなども参加したことで、人口30億人を超える市場規模をもつ地域共同体誕生の可能性を世界にアピールした。